朝の学び「主の教会につらなって生きる」

第52回　愛と奉仕（４）

ルカ福音書１０章３８節以下の「マルタとマリア」のお話です。キリストがマルタとマリアの姉妹の家を訪ねられた時、姉のマルタはキリストをもてなそうと、忙しく働いていました。一方、妹のマリアはキリストの足もとに座って、御言葉に聞き入っていました。マルタはマリアが手伝ってくれないので、しびれを切らして主イエスにお願いします。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」（４０）。するとキリストはマリアにお答えになるのです。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」（４１～４２）

マルタは主をもてなすことに心を奪われ、主の足元に座って御言葉を聞いていたマリアを妨げました。その時主は「必要なことはただ一つだけである」と仰せになって、マルタを戒められたのです。確かに「必要なことはただ一つだけ」です。それは主の御もとに座し、御言葉を聞くことです。すなわち礼拝です。礼拝こそ、教会の命です。礼拝によって、御言葉を聞くことによって教会は立ち、キリスト者の生活も築かれていきます。わたしたちは礼拝こそ教会の他のすべての業に代えがたいものであることを、この聖書箇所から正しく学び取らねばならないのです。

　　しかし、ここでキリストは決して奉仕することそのものを否定しておられるのではないと思います。教会には奉仕の賜物、ディアコニアの賜物が、聖霊の賜物として現実に備えられています。ただし、その賜物が礼拝から切り離されてはならないのです。

御言葉を聞くこと。そのことがキリスト者の行動のありかたを決めるのです。ある牧師先生が、このお話について耳をかたむけるべき指摘をしておられます―主がマルタを戒められたのは、彼女の「奉仕」そのものを不要だと言われたのではない。奉仕が（彼女のほしいままのものではなく）御心にかなったものとなるように、まず御言葉を聞くようにとうながされたのである。同様に、御言葉に静かに耳をかたむけていたマリアは、決してただ聞くだけの人ではなかったはずである。彼女は礼拝の、御言葉の恵みに押し出されて、おのずからディアコニアの働きを担うことへと召し出されていったはずである。

礼拝と奉仕。両者の関係がすこやかなものとされる時、わたしたちはキリストの忠実な働き人とされるのです。